

特集

絶滅の淵から復帰への試み



現在、いろいろな野生動物が絶滅の危機に瀕していることはご存じのことと思います。

今回は当園で飼育する動物の中から、野生ではもう見られなくなったり、絶滅寸前から復活した経緯のある動物について特集してみました。

飼育展示担当：武藤 朱

突然ですが、クイズです。次の数字は何を意味していると思いますか？

Q1

推定100（1930年代）→11（1963年）→177（2002年）

Q2

①推定100（1865年）→2（1911年）→0（1921年）
②推定10以下（1900年）→64（1922年）→250（1939年）

Q3

推定25,000（18世紀末）→68（1953年）→145（2001年）

Q4

→188（1993年）

“動物の数？”そうです。具体的な種類はわからなくても、なんとなく想像はつきますね。おおまかですが、各年代の“野生の数”または“飼育下の数”を表しています。

それではちょっと難しいですが、各々の動物の歴史と絶滅を防ぐ取り組みについてお話ししましょう。

Q1の答えは

ニホンコウノトリ

国の特別天然記念物に指定された1956年には野生で20羽、1963年には11羽に減少していました。兵庫県が野生の鳥を捕獲して飼育を開始しましたが、なかなか繁殖には結びつきませんでした。本人（本鳥？）達にしてみれば、急に慣れない場所に連れて来られさぞ困惑した事でしょう。しかし、1985年にロシアから譲り受けた6羽の幼鳥（野生由来）が1989年に繁殖！それ以後はペアも増え、毎年確実に繁殖し、現在は106羽まで増えています。飼育だけではなく、この兵庫県豊岡市周辺では鳥たちが生活しやすい環境作りにも力を入れました。例えば、採餌場となる河川の浄化や水田での農薬使用の制限、ねぐらの森林整備。そうした地域の人達と行政の協力により、1999年には研究・増殖・飼育・公開の機能を持った“兵庫県立コウノトリの郷公園”が開設されました。



▲ 国内で自然復帰を目指すコウノトリ

近親交配を避けるために国内の動物園と個体の交換も行われています。

2002年には周辺地域に野生個体が飛来し、定住しているようです。2003年からは飼育個体の野生復帰訓練も始まり、2005年の復帰を目指して取り組みが進められています。



▲ 大空をはばたくコウノトリ
兵庫県立コウノトリの郷公園提供

国内では、14施設で177羽（2002年）が飼育されています。当園ではやっとペア飼育となり、去年シュバシコウが繁殖に成功した縁起のいい場所に移って春を迎えます。